

機 関 名	大阪市立大学	機関番号	24402	整理番号	D-1	
1. 申請分野 (該当するものに印)	A<生命科学> B<化学、材料科学> C<情報、電気、電子> D<人文科学> E<学際、複合、新領域>					
2. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	都市文化創造のための人文科学的研究 Studies in the Humanities for the Development of Urban Cultural Creativity					
研究分野及びキーワード	<研究分野: 史学>(文化交流史)(異文化コミュニケーション)(生活様式) (宗教社会学)(芸能・芸術研究)					
3. 専攻等名	<u>哲学歴史学専攻</u> 人間行動学専攻 言語文化学専攻					
4. 事業推進担当者	計 18 名					
ふりがなくローマ字> 氏 名(年齢)	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学 位	役割分担 (初年度の拠点形成計画における分担事項)			
(拠点リーダー) Sakaguchi Hiroyuki 阪口弘之(59)	文学研究科(言語文化学)・教授	演劇史・文博	拠点リーダー、ハンプルク・ロンドン担当			
Kobayashi Michio 小林道夫(56)	文学研究科(哲学歴史学)・教授	哲学・文博	都市の人間チーム			
Sakaehara Towao 栄原永遠男(55)	文学研究科(哲学歴史学)・教授	古代都市史・文博	比較都市文化史チーム副リーダー			
Tsukada Takashi 塚田 孝(47)	文学研究科(哲学歴史学)・教授	近世都市史・文博	比較都市文化史チーム			
Niki Hiroshi 仁木 宏(39)	文学研究科(哲学歴史学)・助教授	中世都市史・文博	比較都市文化史チーム			
Nakamura Keiji 中村圭爾(55)	文学研究科(哲学歴史学)・教授	比較都市史・文博	比較都市文化史チーム			
Inoue Koichi 井上浩一(54)	文学研究科(哲学歴史学)・教授	比較都市史・文修	比較都市文化史チーム			
Morita Yoji 森田洋司(60)	文学研究科(人間行動学)・教授	都市社会学・文博	現代都市文化チーム、上海担当			
Tani Tomio 谷 富夫(50)	文学研究科(人間行動学)・教授	宗教社会学・文博	現代都市文化チーム			
Kaneko Satoru 金児暁嗣(57)	文学研究科(人間行動学)・教授	社会心理学・文博	都市の人間チーム副リーダー			
Toyoda Hisaki 豊田ひさき(58)	文学研究科(人間行動学)・教授	教育社会史・教博	現代都市文化チーム			
Yamano Masahiko 山野正彦(56)	文学研究科(人間行動学)・教授	文化地理学・文博	現代都市文化チーム副リーダー			
Mizuuchi Toshio 水内俊雄(45)	文学研究科(人間行動学)・助教授	都市地理学・文博	現代都市文化チーム			
Yamaguchi Hisakazu 山口久和(53)	文学研究科(言語文化学)・教授	中国思想・文博	都市の人間チーム			
Shibahara Koji 芝原宏治(60)	文学研究科(言語文化学)・教授	英語学・文博	都市の人間チーム			
Miura Kunio 三浦國雄(60)	文学研究科(アジア都市文化学)・教授	中国思想・文博	都市の人間チーム			
Nakagawa Shin 中川 眞(50)	文学研究科(アジア都市文化学)・教授	都市音楽学・文博	現代都市文化チーム、バンコク・ジョ クジャカルタ担当			
Hashizume Shinya 橋爪紳也(41)	文学研究科(アジア都市文化学)・助教授	都市文化学・工博	現代都市文化チーム、バンコク担当			
5. 申請経費(単位:千円)千円未満は切り捨てる						
年 度(平成)	14	15	16	17	18	合 計
申請金額(千円)	54,100	117,330	85,650	85,650	88,650	431,380

6. 拠点形成の目的・必要性

(将来構想等調書との関係を踏まえ、本拠点の特色を述べるとともに、どのような拠点を形成しようとするのかがわかるように焦点を絞り、その目的・必要性について、具体的かつ明確に記入してください。また、背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果とその学術的または社会的な意義・波及効果等についても記入してください。)

【 】これまでの実績

これまで文学部・文学研究科は、以下の注目すべき研究業績をあげてきた。

- (a) 日本学士院賞では、小島憲之(国文学)、天野元之助(東洋史学)、佐藤武敏(東洋史学)の3教授に加え、平成13年度に小林道夫教授(哲学)が受賞し、計4名の受賞者(うち小島教授は恩賜賞)を出しており、研究水準の高さを示している。
- (b) 難波宮跡の発掘調査では、山根徳太郎博士(紫綬褒章)・直木孝次郎教授を中心として国内外に知られる顕著な学問的業績をあげた。その成果は、現在に至るまで都市史研究の基礎であり続けている。
- (c) 野宿生活者調査(平成10、11年度実施)は、山本登・大藪寿一教授らの同和地区・スラム地区の社会実態調査の実績をふまえて実施された。その成果は、政府のホームレスに関する施策の基礎資料として活用されるなど特筆すべきもので、大阪市をはじめ、諸都市の施策の科学的根拠となっている。

このうち特に(b)は都市の歴史的研究、(c)は都市の生活様式にかかわる研究である。本拠点形成計画は、これらの実績の上に立ち、本学の基本計画に従って、平成13年度に再編された文学研究科が取り組む組織的研究である。

【 】本拠点形成の目的と特色

本拠点は、都市に生きる人間のいとなみの基礎となる文化を向上させるために、過去から現在まで、都市を文化の視点から学問的に深く考察し、都市が文化を育み、文化が都市を発展させてきたという都市と文化の相互関係を明らかにすることを目的とする。従来の都市研究は、経済学・政治学・建築工学などに比重があったが、本拠点の特色は、文化に焦点を当てて都市を研究することにある。

研究教育拠点として、文学研究科に「都市文化研究センター」(仮称、以下センター)を設ける。センターには、歴史学を中心とする人文科学の諸分野の研究者等が所属し、3つのチームを構成して研究教育にあたる。このような編成で都市の文化を研究するところに、本拠点の他にない特色がある。

本拠点では、都市に蓄積されてきた文化的伝統(学問・思想・宗教・文学・芸能・生活様式・社会構造等)を歴史的に解明するという基礎研究を重視する。たとえば大坂商人がどのような経済的実力を背景に思想・学問を形成し、文楽等の芸能にかかわったのか、というテーマを、史料調査にもとづいて解明する。

その成果をふまえて、都市文化の現状を調査研究する。大阪をはじめハンプルク・バンコクなどの西欧・アジアの諸都市を対象として、多民族共生にともなう諸文化の共存と摩擦、都市開発による生活環境の変化によって生じた新旧の価値観や生活様式の対立・多様化、都市生活と芸術文化との関係、都市住民の精神生活などを、実態調査その他の方法で研究する。

上記(c)(d)の研究を客観的に進めるために、西欧にかたよることなく、アジアの視点による都市の文化的研究を重視する。そのため、西欧に加えて東・東南アジアの主要大学の所在都市にサブセンターを置き、ネットワークで結んで研究を進める。

将来この分野の研究を担い、本拠点の研究を継続しうる若手研究者を育成する。

【 】本拠点形成の必要性

大阪市は、歴史文化の伝統豊かな国際的都市であり、都市を文化の視点から研究するにふさわしい好適な対象である。本拠点が大阪市に基盤を置くことは、研究を推進するうえで有利な条件である。

本拠点は、文化的観点による都市研究の成果を社会に積極的に発信する。それによって、都市自治体の文化諸施策を支え、文化団体の活動の学問的基礎を提示し、都市文化の水準向上に寄与する。

7 - 1 . 研究拠点形成実施計画

【 】国際学术交流の推進

大阪市立大学は、ドイツのハンブルク大学と学术交流協定を結び、大学間で学术交流を積み上げてきた。現在、文学研究科と同大学との間で「**大阪市立大学プロジェクト研究**」として「大阪市とハンブルク市をめぐる都市・市民・文化・大学」の共同研究を継続中である。本拠点における**都市の文化的研究**は、これを基礎として推進できる。また文学研究科は、ロンドン大学、ドイツ「**恵光**」日本文化センターとも学术交流協定を締結している。

これら西欧の大学等との共同研究に対して、**アジア的視点**による都市の文化的研究を共同して行いうる有力大学として、タイ・チュラロンコン大学、インドネシア・ガジャマダ大学およびインドネシア国立芸術大学、中国・華東師範大学とも、学术交流協定を結んでいる。それにもとづき、これらの大学と共同研究の体制を作り上げつつある。またソウル大学・フィリピン大学・サウスウェールズ大学などの研究者とも、都市文化に関する共同研究が可能である。

ハンブルク市・ロンドン市・上海市・バンコク市・ジョクジャカルタ市・ペキン市に**サブセンター**の施設を確保し、共同研究推進の基地とする。

【 】研究教育チームの設定と研究の推進

「都市文化研究センター」に次の3つの研究教育チームを設け、学术交流協定を締結した諸大学の研究者と協力して、文化に焦点を当てて都市を研究する。各チームは、研究機能とともに教育機能を有する。

- A **比較都市文化史研究**（港市としての大阪・ハンブルク・バンコクの都市文化形成の比較、大阪とジョクジャカルタにおける都市生活史と芸能・文化遺産の関係など）
- B **現代都市文化研究**（西欧・アジアの諸都市における多文化共生・異文化コミュニケーション・多様な生活様式のあり方などの実態調査・分析）
- C **都市の人間研究**（過去・現在の都市に生きる人間の思想・宗教・文学、都市生活と芸術・芸能の関係など）

3チームの研究を、相互に前提としあいながら推進することで、過去から現在まで、都市を文化の視点から研究し、都市が文化を育み、文化が都市を発展させてきたという都市と文化の相互関係を明らかにする。

事業推進担当で構成する「**センター会議**」が事業の推進を全体的に統轄する。「センター会議」のもとに「**常任委員会**」、各チームの「**運営委員会**」、「**事務局**」を置く。「常任委員会」は**拠点リーダーと副リーダー**で構成する。「運営委員会」は副リーダーを中心に運営する。「事務局」に事務担当者を複数名雇用する。

後期博士課程大学院学生を、各自の研究計画にもとづいて、**COE 研究員**として各チームに参加させ、本拠点の将来を担う若手研究者として養成する。

国内外の優れた研究者を招聘する。後期博士課程大学院学生を対象とする討論主体のゼミナールを開き、3チームの研究者と共同研究を行うなど、世界の頭脳と積極的な交流をはかる。また、国際シンポジウム、研究会を適宜開催する。

本拠点の**ホームページ**を立ち上げ、センター・サブセンターや共同研究を行う大学を結ぶ研究教育のネットワーク環境を確保し、研究成果の提示や意見交換の場とし、優秀なCOE研究員を確保する手段とする。比較都市文化史、現代都市文化、都市の人間に関する複合的**データベース**を構築し、ホームページに組み込む。

【 】研究成果の公開と社会への還元

各チームの研究成果は、ホームページ、学術雑誌『**都市文化研究**』（仮称）に公表する。そのうち発展性のある研究、国際シンポジウムの成果は、『**大阪市立大学文学研究科叢書**』（仮称）の1冊として刊行する。

大阪市をはじめ世界で文化の創造に取り組んでいる都市自治体に対して、研究成果を発信し、具体的提言を行う。メディア・ホームページの活用、公開講演会の開催により、研究成果を行政担当者、文化産業関係者、一般市民に還元する。

7 - 2 . 年度別の具体的な研究拠点形成実施計画
(項目 7 - 1 において記入された内容の年度毎の取り組み計画)

平成 14 年度 :

初年度は、A B C の 3 つの研究教育チームの編成、サブセンターの設置とこれに関係する大学との**研究交流の基盤整備**に力を注ぐ。そのために(a) ~ (d)を行う。

(a) 各チームに参加する研究者・大学院学生 (C O E 研究員) を決め、「運営委員会」を設ける。

(b) 3 チームのメンバーである研究者 (以下、研究者という) をハンプルク市・バンコク市・ジョクジャカルタ市・上海市に派遣し、サブセンターを設置する。

(c) この研究者はサブセンターに滞在しつつ、ハンプルク大学・チュラロンコン大学・ガジャマダ大学・インドネシア国立芸術大学・華東師範大学との**研究交流基盤の確立**をはかる。

(以下 印をつけた項目は、本研究の期間を通じて維持するものである。)

(d) 同じく他の研究者をドイツ「恵光」日本文化センター・ロンドン大学等に派遣して、**研究交流基盤の確立**をはかる。

国内外の優れた研究者を招聘し、ゼミナール等を開く。

都市文化研究のための基礎的調査・共同研究の準備にとりかかる。

比較都市文化史研究に関するシンポジウムを準備する。

研究拠点**ホームページ**を立ち上げる。比較都市文化史、現代都市文化、都市の人間に関する複合的な**データベース**の構築に着手し、ホームページに組み込む。

『都市文化研究』を発刊する。

『大阪市立大学文学研究科叢書』の刊行計画を立案する。

平成 15 年度 :

2 年度目は、初年度に引き続き、研究交流基盤の確立に努力するとともに、**教育面での交流**を展開する。また、**アジア都市文化学専攻後期博士課程**設置に伴い、同専攻を拠点専攻に加え、拠点としての充実を図る。

(a) 前期に研究者を北京市、ロンドン市に派遣し、サブセンターを増設する。

(b) この研究者はサブセンターに滞在しつつ、中国社会科学院・ロンドン大学との**研究交流基盤の確立**をはかる。

(c) ハンプルク大学・ドイツ「恵光」日本文化センター・ロンドン大学・チュラロンコン大学・ガジャマダ大学・インドネシア国立芸術大学・華東師範大学等と、大学院学生を交換して研究教育交流の基盤を確立する。

(d) サマースクールを開催する。

都市文化研究のための基礎的調査・共同研究を実施する。

後期に比較都市文化史研究に関する**国際シンポジウム**を開催する。現代都市文化研究に関する**国際シンポジウム**を準備する。

データベースを公開する。

『都市文化研究』『大阪市立大学文学研究科叢書』を刊行する。国際シンポジウムの成果をその 1 冊として刊行する。(以後、各年度とも同じ)

平成 16 年度 :

研究教育チームの運営、参加する研究者・大学院学生の見直しを行う。

後期に現代都市文化研究に関する**国際シンポジウム**を開催する。都市の人間研究に関する**国際シンポジウム**を準備する。

平成 17 年度 :

後期に都市の人間研究に関する**国際シンポジウム**を開催する。5 年間の研究を総括する**国際シンポジウム**を準備する。

平成 18 年度 :

5 年間の研究を総括する**国際シンポジウム**を開催する。

8. 教育実施計画

(拠点形成の際に実施される教育関係の取り組み計画を具体的に記入して下さい。)

【 】教育実施計画の背景

本拠点の中核専攻である哲学歴史学専攻と人間行動学専攻では、後期博士課程の入学者数は、毎年安定して確保されており、教育拠点を形成するのに十分な数の後期博士課程大学院学生が在籍している。また、課程博士の学位を取得するものも増加傾向にある。さらに、アジア諸国からの留学生が多いことも、本拠点形成の目的にかなっている。

本研究科ならびに国内外の大学の優秀な後期博士課程大学院学生を、研究計画書にもとづいて、3研究教育チームのいずれかに参加させる(以下、COE研究員という)。

【 】教育の基本方針

文学研究科の後期博士課程は3つの専攻によって構成され、各専攻はいくつかの専門分野に分かれている。これまでの後期博士課程大学院学生に対する教育は、ややもすれば専門分野の枠内で行われてきた。しかし、本拠点の教育は、これにとらわれないで行う。世界から優れた研究者を招聘し、専門分野や、場合によっては専攻にまたがるゼミナールを開き、これに参加するCOE研究員の視野の拡大と研究の充実を図る。

3チームには、上記専門分野を超えて研究者が参加している。COE研究員をこれに参加させることにより、都市の文化に関する幅広い識見を身につけさせる。これによって、従来の専門分野にとらわれていたのでは得られない有効な研究視角を定めさせる。

COE研究員を対象とするサマースクールを開き、国内外の優れた研究者や事業推進担当者等により、フィールドワークや調査研究の方法、学会における発表方法の指導を徹底して行う。

優秀なCOE研究員には、サブセンターなどでの長期海外研修や、国際学会または3チームで行う研究会での発表の機会を与え、研究活動を活性化する。また、本学のTA制度やRA制度を活用し、後輩の指導を通じて能力を発揮できる場を保障する。

本プログラムにより学位を取得したCOE研究員については、学長に申請して都市文化研究センターの博士研究員として採用する。これによって、業績の優れた大学院学生を経済的にも支援し、さらなる研究発展の場を保障するとともに、本拠点の将来を担う若手研究者として養成する。

研究拠点ホームページ上で、かかる諸制度を国内外にアピールし、優秀な大学院学生をCOE研究員として確保することに努める。

COE研究員が本拠点に参加してあげた研究成果の内容は、ホームページにて公表するとともに、『都市文化研究』もしくは『大阪市立大学文学研究科叢書』に掲載する。